

博士論文の審査結果の要旨

| | | | |
|--|--|------|-------|
| 専攻 | 保健医療学専攻 | 分野 | 看護学 |
| 学籍番号 | | 院生氏名 | 田原 恭子 |
| 通学キャンパス | 福岡キャンパス | | |
| 論文題目 | 外科関連病棟看護師の術後せん妄ケアに関する研究 —「術後せん妄スクリーニング尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証 | | |
| 審査結果(枠で囲む) | 合格 | | 不合格 |
| <p><審査結果の要旨></p> <p>高齢社会となった我が国において、高齢者に対する手術件数が増加している。手術件数の増加は、加齢変化に伴う術後せん妄の発症頻度に大きく影響し、特に高齢患者の術後せん妄は、認知症発症の因子になるとともに、転倒リスクや死亡リスクを高め、高齢患者の予後に多大な影響をもたらしている。本研究の目的は、このような術後せん妄の早期発見と早期予防を目指して、外科関連病棟に勤務する看護師が術後せん妄を早期に発見できる測定尺度Postoperative Delirium Suspected Screening Scale (PDSSS)を開発することである。</p> <p>本研究は、尺度項目原案の精選と開発尺度の信頼性と妥当性を検証するために、研究Ⅰから研究Ⅲの三段階から構成される。研究ⅠのPDSSS項目原案の作成と精選は、step1において12名の看護師に対する面接調査から24項目が、step2では文献から下位尺度項目を中心に16項目が抽出された。step3では上記項目のアイテムプールから看護記録による表現を加え21項目が抽出された。step4では専門家会議の協議から前述の21項目から23項目に精選された。さらに14名の外科関連病棟看護師によるワーディングチェックにより、PDSSS原案は、2つのカテゴリー、6つのサブカテゴリー、23項目に整理された。研究Ⅱでは、術後せん妄の発症時期と収束時期を特定するために、九州・関東地域4病院の外科関連病棟の診療記録を調査した。その結果、術後せん妄の発症時期が術後12時間以内、持続時間が約3日間であることが確認され、研究Ⅲの調査時期として活用された。研究Ⅲでは、作成した尺度の信頼性と妥当性が検証された。関東近郊の急性期病院外科関連病棟看護師237名を対象に基本的属性とPDSSS原案、Glasgow Coma Scale (GCS)を調査し、有効回答者数97名を分析対象とした。PDSSS原案(23項目)は項目分析(I-T分析)と探索的因子分析により14項目が採用された。尺度の信頼性として内的整合性はCranach's α係数が0.844であり、再検査信頼性は時間的安定性として1回目と2回目の調査時期に評価間の有意差がないこと、また、評定者間信頼性として看護師の能力や経験による差がないことが確認された。妥当性はPDSSSとGCSとの相関係数$r=0.602$から基準関連妥当性が確認され、内容的妥当性と構成概念妥当性は因子名などの整合性と適切性を検討することにより確認された。以上から、PDSSSは、①意味ある行動のコントロール欠除の認識、②知覚異常発言の兆候の認識、③刺激に対する過剰反応の出現の認識という3つの因子と下位尺度14項目から構成され、信頼性と妥当性が確認されることによって外科関連病棟の看護師が術後せん妄の早期発見に活用できると結論づけられた。</p> <p>本研究は、手術療法を受ける高齢者が増加するなかで、術後せん妄の早期発見に着目し、外科関連病棟看護師の経験年数や能力に問わず活用できるという尺度の開発に新規性があり、臨床看護上の問題解決に向けて貢献性が高く十分な価値があると認められた。</p> <p>審査会の審査員全員が、本論文を申請者が自立して研究を行うにあたり十分な能力と学識を備えていることを証するものとし、博士(看護学)の学位を授与するに相当すると認めた。</p> | | | |
| 論文審査担当者 | <p>主 査 大池美也子</p> <p>副 査 原口 健三</p> <p>副 査 青木 万里</p> | | |